



# 東大機械同窓會名簿

第六十号

附会報第五十六号  
平成24年11月現在

追補編

廃却の際は必ず焼却または裁断して下さい。

この名簿は会員の個人情報です。会員以外に  
流出させないよう充分配慮して下さい。

# 東大機械同窓會

# 『東大機械同窓会第一回卒業生 — 5人の足跡を辿る—』

東京大学名誉教授、工学院大学

大橋 秀雄 (昭和29年卒)



分厚い東大機械同窓会名簿を開くと、最初に会報や母校の近況報告が並んでいる。それに続いて学部卒業生の名簿が始まり、先ず明治の部として（明治18年迄ノ工学士ハ工部大学校卒業ノ者）という注釈付きで明治12年の第一回卒業生から氏名が並んでいる。当然ながらすべてが逝去会員である。

第一回卒業生は、<sup>あらかわしんいちろう</sup>荒川新一郎、<sup>いまだせいしん</sup>今田清之進、<sup>たかまなおもと</sup>高山直賢、<sup>みよししんろくろう</sup>三好晋六郎、<sup>みやまきこうじ</sup>宮崎航次の5人（敬称略、以下同じ）、我々の先輩のなかでも、まさに元祖ともいうべき方々である。

この5人の名前に目を留めた方は多いと思う。私もその一人であるが、「ああ、三好晋六郎は知っている」と呟いて、それ以上立ち入ることはなかった。誰でも齢を重ねるにつれ昔のことが気になり始める。私も傘寿を越え、この5人の大先輩がどんな人生を辿ったか知りたくなり、一念発起して調べることにした。以下はその顛末記である。

5人の足跡を理解するには、政治、教育、産業などにわたる時代背景を知らなければならない。それらに踏み込み始めると、一冊の本でも足りなくなってしまう。ここではネットや書籍などで簡単に探せる情報の再録は最小限に留め、調べるのに苦労した、その苦労度に応じて字数を割いた。字数や順序は、功績や栄誉とは無関係なことを予めお断りする。

## 工部大学校第一回卒業生

同じ5人でも長州五傑をご存知ですか。長州ファイブの題名で映画にもなったので、ご覧になった方もあるでしょう。維新を遡ること5年の文久3年、「生きたる機械」となって帰ってこいという長州藩主の密命をうけ、5人の藩士が横浜港からイギリスに向けて密出国した。欧米の進んだ機械を輸入するだけでは先がない、機械を生み出せる人材、それを生きた機械と表現して使命を託したのである。その5人は伊藤博文、井上馨、山尾庸三、井上勝、遠藤謹助で、維新後の近代国家成立に中心的役割を果たした。後世それぞれに、内閣、外交、工学、鉄道、造幣の父と称えるようになった。

5人は揃ってロンドン大学で勉強を始めたが、英仏米蘭4国と長州藩の開戦間近しとの知らせを受け、それを阻止しようと伊藤と井上馨は僅か半年の滞英で急遽帰国した。残った3人は受講と現地見学を精力的に続けた。山尾は、3年間の講義を終えたあとグラスゴーのナビア造船所で徒弟として実習を始めたが、大政奉還の知らせを受けて帰国した。

発足したばかりの明治政府に加わった山尾は、先ず工部省をつくり、次いで工業を支える人材を育成する大学作りに取りかかった。政府の中では「工業が全くないところに人を育てても、働き場所がないから無駄だ」という意見が支配的だったが、山尾は「タトエ工業無クモ、人ヲ作レバ、ソノ人工業ヲ見出スベシ」と主張して説得に成功し、明治6年に「工部ニ奉職スル工業士官ヲ教育スル学校」として工

学寮が発足した。明治10年には寮制度が廃止され、大鳥圭介工作局長を総理とする工部大学校に改組されて、明治12年に第一回卒業生を送りだした。教頭にはグラスゴーから招聘した弱冠25才のヘンリー・ダイアーが就任し、理論と実務を融合させた当時としては先進的な6年制工学教育（予科、専門科、実地科各2年）をこの極東の地に実現した。よく知られている話はこちらまでにして、あまり知られていないことを二三追加しよう。

(1) 入学 維新前は、士族の子弟は藩校や私塾に通って早期教育を受けるのが普通だった。維新後は、藩校に替わる教育機関が東京に続々と創設され、そこを目指して全国の英俊が上京した。開成学校、海軍兵学寮、工部省の修技校（電信、灯台、造船、鉱山、測量司等）などである。明治6年の工学寮第1期生に応募したのは、これらの学校の在学生在が主体だった。入学を許された32名のほとんどが、工業士官が似合う士族出身なのは時代の反映である。教育は徹底した競争主義で、名簿の掲載順も寮の部屋割りも、すべて成績の点数順だった。最優秀の4人は同室で過ごしたが、高峰讓吉（化学）、志田林三郎（電気）、荒川（機械）、南清（土木）の4人はその常連として一目置かれた。当時の教育は、講義、実習などによる知識・技能の伝授が主体で、研究は皆無だった。卒業に当たってはEssayという形で、各自が選んだテーマについて調査、考究した結果を提出することが課せられた。工2号館図書室には、提出されたオリジナルEssayが製本して保管されている。すべて流麗な手書き英文である。5人の紹介欄に掲げるサインは、そのEssayから転写したものである。

(2) 卒業 明治12年11月の第一回卒業式で23名のわが国初の工学士が誕生したといわれているが、実際は8名だった。イギリスでは同じBachelorでもHonorsが付くかどうかで峻別されるが、工部大学校ではそれに輪をかけて卒業が一等から三等まで3段階に分けられた。一等には直ちに工学士の位が授与されたが、二等には卒業証書、三等には日程終了証書が授与された。学位なしに卒業した者には、工部大学校が帝国大学に併合されて工科大学に変わったのち、明治20年に一括して工学士の称号<sup>1</sup>が認許された。英文の学位記には、Imperial College of EngineeringがMaster of Engineeringを授与すると書いている。工部省所管を示す工部大学校より、帝国Imperialの方がはるかに格式が高い。英文名では、工部大学校が東京大学を併合している。

機械科を卒業した5人のうち、荒川、高山、三好が一等、今田、宮崎が二等だった。

(3) 留学 工部大学校は、お雇い外国人の件費増大に悩む大蔵省から、外人に替わる日本人を早く育成するよう強く要請されていた。それに応えるため、第一回卒業生のうち11の学問分野の首席に3年間の英国留学が命じられた。機械科からは、機械学の高山、造船学の三好、紡織学の荒川が選ばれ、一等卒業生が全員留学組に入った。造家科は辰野金吾、電気科は志田、化学科は高峰だけだったことを考えると、造船を含め機械科の守備範囲が広いことが当時から認められていた。留学組には、「生きた人材再生産機」となって帰国することが、政府からの使命として与えられた。その11名のうち、帰国までに亡くなった1名を除くと4名が後に工科大学教授となり、残りは高峰の化学工業を始めとして鉄道、製鉄、鉱山、紡織、灯台の各分野で産業発展を牽引した。なお留学組のうち薩長出身者は荒川一人に過ぎない。政治の分野では薩長の勢いが突出するなか、それから外れた諸藩の英俊が国力の礎となる産業発展に自らの進路を重ね合わせた心情が十分理解できる。

(4) 俸給 官費卒業生（1期生は全員）には、7年間官職に付くことが義務づけられ、それに反するときは学費の一部返却が求められた。任官<sup>2</sup>するときの俸給は、就職先に関わらず一等卒業生は月給30円、

---

1 明治20年の学位令により、学士が学位から称号に変えられた。平成2年の学位規則の改正により、学士が103年振りに学位に返り咲いた。多分に法令字句の問題で、実質は変わらない。

二等は25円と統一基準が設けられた。当時の東京大学卒理学士の初任給は50円が相場だったので、学生が工部省の山尾卿（大臣）に増額の陳情<sup>3</sup>をしたが、ストイックな卿は「若年の卒業生に金を沢山与えるは有害無益なり」と言って聞き入れなかった。もし山尾が「高い俸給は自信と責任感を高める」と言っていたら、工学士をめぐる状況は大きく変わったことだろう。工芸技術を下に見る風潮を断ち切り、山尾は工学の父を越えて工学の守護神と称えられたかもしれない。

(5) その後の工部大学校 明治18年の内閣制度発足にあわせ工部省は廃止され、その業務は農商務省と通信省に分割移管された。ただし工部大学校だけは文部省に移管され、翌年3月に発足した帝国大学に併合されて工科大学となった。この折に、科名も機械科から機械工学科に変わった。大正7年の大学令により学部制が導入され、以降は工学部機械工学科と称して現在に続いている。

## 5 人の履歴一覧

個別の紹介に移る前に、先ず履歴の共通事項に関する一覧表で全体像を把握していただきたい。以下明治の年月日を My/m/d と略記する。

氏名	荒川新一郎	今田清之進	高山直質 旧姓 おおき 大城	三好晋六郎	宮崎航次 旧姓 市川
誕生年 出身、本籍	安政4 (1857) 山口	安政元 (1854) 山口	安政2 (1855) 熊本	安政4 (1857) 静岡、東京	安政3 (1856) 愛媛、東京
工学寮入学前	海軍兵学寮、勸工寮	測量司修技校	灯台寮	勸工寮	開成学校
Essay テーマ	Cotton Manufacture	Stationary Engines	Iron Manufacture	Locomotive Engines	Marine Engines
卒業成績	一等	二等	一等	一等	二等
留学先 専攻	Manchester 紡織学	-	Glasgow 機械学	Glasgow 造船学	-
任官年と初官職	M16：農商務省 准奏任御用掛	M12： 工部8等技手	M15：工部省 准奏任御用掛	M16：工部省 准奏任御用掛	M12： 工部8等技手
主要な経歴	農商務省工務局 技師	陸軍省大阪砲兵 工廠技師	工科大学 教授（機械）	工科大学 教授（造船）	通信省 鉄道技監
没年 享年（満）	昭和5 (1930) 73	昭和14 (1939) 85	M19 (1886) 31	M43 (1910) 53	M41 (1908) 52

以下に述べる個別の紹介記事は、すでにお断りしたように、知名度が高く調査が容易だった順に記載し、その記事量は情報発掘の苦労度に応じて配分した。なお写真は、工部大学校卒業式後の集合写真が唯一の手掛かりで、それから名前を頼りに抜き出したものを使った。全員お揃いの制服正装姿である。

- 官吏の職階と俸給：職階は判任官、奏任官、勅任官、親任官に分けられ、奏任官以上は高等官と呼ばれた。発令の仕方が異なり、判任官は大臣が発令し、奏任官は総理大臣が天皇の裁可（御璽）を得て発令する。俸給は、判任官は月給制、高等官は年俸制で等級別に決められる。
- 基準俸給は、一等でも判任官の中間以下の低位に相当し、少尉の50円と比べて工業士官どころか下士官並みである。山尾は下積み之苦労を体験させようと意図していたが、高踏的すぎたとの批判もある。

\*\*\*\*\*

## 三好晋六郎

*Miyoshi Shunroku*



本郷キャンパスの北端に、言問通りに沿うように昭和12年竣工の船舶曳航試験水槽の細長い建物が伸びている。その本館入り口近くに、台座に載った緑青色の胸像が置かれている。これは、どなたも一度は眼にしたに違いない。工部大学校造船科の初の日本人教官としてスタートし、船舶工学の創始者といわれる三好の胸像である。その建立は大正3年に遡るから、水槽完成前は違う場所に置かれていたのだろう。胸像の脇に置かれた案内板に、経歴が次のように簡潔に紹介されている。「1879年に工部大学校機械工学科を卒業し、直ちにイギリスに留学した。82年に造船学科が新設され、83年に帰国し助教授となり、造船学第一講座を担当した。86年に初代の日本人教授となり、後の発展の礎を築いた。学問が未分化のこの期にあっては船舶の設計製図が中心課題であったが、97年、汽船神奈川丸外5隻の速力試験成績を発表、設計上有益な資料として注目された。」やや意地悪な注釈を加えると、大学に講座制が導入されたのは1893年（M26）、三好が工科大学教授に就任してから7年後のことである。



工部大学校に造船科が設置されたのはM15で、その翌年の第5回卒業から造船科卒が巣立ち始めた。海軍からの強い要請がその裏にあった。三好の学生時代は、機械と造船がまだ渾然としていたのだろう。造船に進んだ三好の Essay のテーマが Locomotive Engines、鉄道に進んだ宮崎のテーマが Marine Engines というのは、面白い組み合わせである。三好と造船の結びつきが何時始まったかは不明だが、留学命令には造船学専攻と明示されている。

M19の帝国大学工科大学発足と同時に造船学担当の教授に任命された三好は、わが国の造船教育の始祖となるだけでなく、通信技監を兼ねて海事行政の実務に参画するなど、教育と産業の振興にその生涯を捧げた。M30に造船協会（日本船舶海洋工学会の前身）を創立し、会長の赤松則良海軍中將を助け、副会長として終身協会発展の推進役を果たした。同じ年に機械科2年後輩の真野文二が機械学会を創立したが、三好がそれに加わることはなかった。

M43大学で執務中に脳溢血で倒れ、帰らぬ人となった。享年53、上野の谷中墓地に眠る。性格は従順、謹直にして粗暴を嫌い、常に文書を読み、絵図を見るのを無上の喜びとしたと伝えられている。

余談を一つ追加させていただきたい。大学出の技師だけでは工業は興せない。学理をわきまえ技師の手足となって実務に当たる人材、いまでいえば中堅技術者、当時の言葉では工手の育成も急を要した。初代帝国大学総長に就任した渡辺洪基は、初代工科大学長古市公威と相談して、そのための学校設立を文部省に掛け合ったが、「此ノ輩ヲ養成スル費用ナシ」と断られた。渡辺は、自ら募金して基金を整え、就任翌年のM20に私立工手学校を創立した。設立趣旨には「各科技師ノ補助タルヘキ工手ヲ養成スル」と明記されている。その工手学校の初代管理長を渡辺が、二代目を古市が引き受けた。また14人の設立

委員のうち、辰野、三好、中村貞吉（化学）、石橋絢彦（土木）、栗本廉（冶金）の5人の第一回卒業生を含め11名が工部大学校卒である。さらに、工手学校初代校長を中村、三代目を三好、四代目を石橋が務めている。すべて本職を抱えたうえでの兼務である。三好はM30から逝去までの13年間、多忙な時間を割いて校長の役を果たした。工手学校は、その後工学院、工学院大学と名を変えて今日に至っている。私は平成4年に母校を定年退職後、縁あって工学院大学に奉職し、そこで学長、理事長を務めた。その草創期を振り返るとき、工部大学校卒の先輩が総力を挙げて支援してくださった恩義を終生忘れることはできない。



\*\*\*\*\*

## 高山直質

Takayama Naomoto

熊本の細川藩に仕える大城家に生まれたが、工部大学校在学中に高山家の養子となって改姓した。7才の頃から藩校で学び、その勤勉振りは早くから藩主の目にとまり褒美を賜った。中でも数学の才が突出していた。M4藩主の命で修学のため上京した。当時欧米の学問が盛んになり始めていたが、工芸技術は蔑まれ軽視されていた。高山はこの風潮を嘆き、自らそこに身を投じた。同年の8月から灯台寮の修技学校に通学を始めたが、進歩は早く、翌年1月には灯台寮技術見習いを命ぜられている。M6に工学寮の生徒募集が始まると、高山はその教育の将来性を素早く察知して入学を決意し、晴れて第1期入学生に選ばれた。記録には補欠入学と残っている。

高山は、工学寮、工部大学校と続く中でも勉学の勢いは衰えなかった。機械の中でも鉄鋼製造に興味を示し、卒業 Essay のテーマもそれに従った。卒業成績は志田に次いで全体で2位、機械科では首席だった。卒業はもちろん一等で、直ちに工学士の位が与えられた。

M13/2留学組11名が揃ってフランス船ヴォルガ号に乗り横浜港からイギリスに向かった。機械学の研鑽を命じられた高山もその一人である。志田、高山、南の3人は揃ってグラスゴー大学に入学した。在学僅か1年ながら、3人の成績優秀ぶりは伝説的でもあった。志田は全グラスゴー大学の最優秀生に与えられるクリーランド金賞を獲得し、有名なケルビン卿から「私が教えた最高の学生」と称えられた。物理学と高等土木学を専攻した高山も、ハーヴィ賞一位、ウォーカー賞三位を得て名をとどろかせ、南もハーヴィ賞三位、ウォーカー賞三位（高山と同点）を得てこれに続いた。当時のグラスゴー大学は、熱力学の基礎を築いたケルビン、ランキンを始め著名な教授が揃っており、工学系で最も力のある大学と認められていた。なお三好は、グラスゴーに到着後まずナピア造船所で研修し、それを終えてからグラスゴー大学に入学した。

大学を終えた高山は、グラスゴー東南に位置する鉄の都マザウエルの製鉄鉄鋼工場で実習を始めた。刻苦精励が過ぎたせいかわがて製鉄所の高熱と過度の力役のため肺と喉を痛め、厳冬を前に帰国を決意した。同じ留学生の近藤貴蔵（鉦山）が、肺病を患って帰国途中、上海で落命した轍を踏むまいと用心したのだろう。予定より1年早くM15/11単独で帰国して工部省准奏任御用掛に任ぜられた。

高山の留学中の貢献として、ボイラーの保険、検査の重要性を指摘した「蒸気缶破裂予防要件」と題する報告書を送ったことが挙げられる。当時イギリスには約8万基のボイラーがあったが、M12だけでこのうちの53基が破裂事故を起こしたこと、事故を防ぐには保険会社の検査指導が大きな効果を挙げる

ことなどを報告して、日本で保険事業と検査機関が誕生する端緒を作った。没後工学会誌に載せられた追悼文の中に「意ヲ汽缶保険ト魚獵ニ注グ」と述べられているように、彼の短い人生を飾る大きな足跡となった。なお、「魚獵ニ注グ」とあるのは、オーストラリアでの真珠採取に貢献したことを指すのか、趣味の釣りのことを指すのか、両説がある。

M16/5から工部大学校に出勤を始め、M17/12機械科助教授を命ぜられた。その後の様子は、「学務に精励、疾病に関わらず講義丁寧。咽頭呼吸異常にかかわらず学務に従う。工学会で瓦斯機関につき講演」と伝えられている。

帝国大学令はM19/3/1裁可、翌日官報で公布され、工部大学校を併合して帝国大学が発足した。高山は3月7日にこの世を去っている。高山は三好と一緒に工科大学教授を命ぜられたと伝えられているが、当時の公文書を探す限り、三好を工科大学教授に任ずという3月31日付の内閣総理大臣伊藤博文の奏任状が見つかるだけで、そこに並ぶべき高山の名はない。転換時の発令の遅れを配慮し、高山は没後工科大学教授として遇されたのだろう。もし命を長らえていたら、彼はウエストとともに最初の工科大学機械工学科教授として、機械工学のリーダーになったことだろう。第3回機械科卒の真野文二が担った輝かしい役割、日本人初の機械工学科教授、機械学会創設会長、文部省の教育行政官などのかなりが、高山によって担われたことと思われる。

高山の葬儀には三百人余りが集まり、故人の早すぎる逝去を悼んだ。温厚確実、事に当たっては秘密で気付く点はすべて書き留め、それを良く整理された数十巻の備忘録として残した。撰生に意を払い、ひとたび話題がそこに及ぶと医者もかなわぬ博識を示した。常日頃、死生は定めのようなものだが、撰生に越したことはないと言った、等々、高山の人と為りを偲ぶ声 flowed。また、グラスゴーヘラルド新聞に載った Williamson 指導教授の談が紹介され、高山が口頭試問に際して語勢・抑揚から語句の選択まで見事に操り、意志を明確に表現したという、その英語能力の高さも賞賛された。弔辞を述べた後輩の真野は、「嗚呼君ノ如キハ學術ヲ以テ始マリ學術ノ為ニ倒ル者ト謂ウベシ。君職ニ任スル僅カニ四年ト謂エドモ學業及ビ学会等ニ於テ其ノ功甚大、豈之ヲ子孫ニ伝エザル可ンヤ」という言葉で結んでいる。

31年の濃密な人生を終え、いまウエストと共に青山墓地に眠る。



\*\*\*\*\*

## 今田清之進

*S. Imada*

山口県土族の家に生まれた今田は、維新後に速やかに上京してM4工部省測量司修技校で学び、M5に測量司技術等外見習下役を仰せつかった。早くから藩校で学び、その才能が抜きんでいたのでに違いない。また勝ち組の長州藩から、政治ではなく敢えて技術の道を選んだのは、数理の才に恵まれていたからだろう。今田については、これまでの三好、高山に比べて得られる情報が極端に少ない。想像を働かせながらその足跡を追う。

工学寮発足の前年から入校を命ぜられていたが、M6予定通り第1期生として入学を果たした。卒業に当たり定置型エンジンについて Essay をまとめ、M12に二等の成績で第一回卒業生に加わった。

卒業後工部8等技手として規定通り月給25円を受ける。直ちに陸軍省に転属され、御用掛として大阪

砲兵工廠に赴任した。以来M29年の満期退官まで17年間、技手から技師へと昇進<sup>4</sup>を重ねながら日清戦争で威力を発揮した火砲の開発・製造に携わった。今田の退官までに、大阪砲兵工廠は口径27糎の巨大な海岸砲を製造できるまで設備の増強が進んだ。退官直前の位階は従七位で技師奏任5等<sup>5</sup>の処遇を受けた。砲兵工廠の提理は歴代陸軍砲兵大佐が就任し、軍人支配の世界である。兵器に関することは秘密が多く、実績が外に出ることはほとんどない。発明などの功績は上官に回され、技官は縁の下の力持ちで出世が遅いなど、軍で働くことは当時の学士に敬遠される仕事だった。今田はその仕事を堅実に果たし、戦力の基盤となる火器、銃砲の増強に貢献した。その自負を胸に退官したことだろう。大正8年に陸軍技術将校令が施行されてからは、工学部を出て技術将校の道を歩めば中将まで昇進する道が開かれた。遙かそれ以前の話である。

今田の砲兵工廠在任中の記録としては、M21に和歌山紡績会社の工事監督併任を願い出て蒸気機関の据え付けを指導したこと、M26に東京砲兵工廠に出張を命ぜられたこと、M25に36才の若さで亡くなった同級志田林三郎の葬儀に「故志田君を想ふ」と題する追悼文<sup>6</sup>を送ったことくらいしか見つからない。

M29に退官して第二の人生に進んだ。なお退官に際し、その功績に報いるために退官資金増額の恩典に浴している。新しい職場は愛媛県新居浜の住友別子鉱業所である。当時の新居浜は、別子鉱山を中心に、住友が金属、機械、電気、化学にわたるコンビナートを築き始めていた。そこで11年間勤務し、M40に退職して東京に転居した。同年の工業紳士録に、今田は住友別子鉱業所機械課主任として載っている。退官したあとの仕事が主任かと、私は一瞬目を疑った。しかしその機械課は、やがて住友機械製作所、住友機械工業と成長、発展を続け現在の住友重機械工業に至っている。住友重機械の要職なら、働き甲斐のある転職先だったのだろう。

工部大学校卒業以来関西、四国の生活が続いたが、28年振りに東京に戻り、永住の地を東京府荏原郡入新井村字山王に決めた。その住所は昭和7年東京市大森区山王に変わった。のどかな田園地帯が都市化につれて市内有数の高級住宅地に変貌したのである。昭和14年に85才で亡くなるまで、今田は32年間にわたりこの地で豊かな老後を過ごしたに違いない。



大正4年に第一回卒業生が開いた同期会の集合写真が残っている。そこには辰野を始め10人の生き残りが写っているが、機械科卒は今田一人である（荒川は欠席）。そこから抜き出した写真が左にある。61才でなお精気みなぎる様子がうかがえる。充実した隠退生活だったのだろう。今田以外の4人にこのような写真が見つからないのは残念である。

今田はM30に機械学会が創立されると直ちに入会し、最初の名簿から名を連ねている。2年後には金50円を支払って終身会員となり、以降は終身会員の肩書き付きで名簿に載り続けた。機械学会誌の昭和15年1月号には、今田の死亡告知が載っており、40年余の永年会員の逝去を悼んでいる。今田の名前は、そのほか工学会や学士会の会員名簿にもその時々住所とあわせて正確に載っている。交際を重んじ身辺をきちんと整える性格だったのだろう。なお東大機械同窓会は昭和28年に設立され、以来毎年名簿を発行してきた。今田先輩もあと14年長生きすれば、生存者として最初の同窓会名簿に載ることができたのに。

4 技術官の職階：M19内閣制度導入以前は判任官の技手1-10等のみ、以降は技手に加え、奏任官1-6等の技師、勅任官の技監まで拡大された。官職としての技師は、M19以前には存在しない。

5 俸給表によると年俸800円

6 昭和2年刊行の「故志田林三郎同富子記念録」に真野の追悼文とあわせて収録されている。

人生50年といわれた当時では、享年85は異例な長寿だった。なお2年後輩で機械工学科教授として活躍した真野も85才の長寿を全うしている。



\*\*\*\*

## 宮崎航次

*K. Ichikawa*

宮崎の顔は前列に並んだ杉山輯吉<sup>7</sup>(土木)の頭に邪魔されているが、これが貴重な唯一の写真である。卒業 Essay のサインは市川となっているが、卒業前後に改姓したのだろう、卒業名簿は宮崎で載っている。伊予宇和島の市川家で生まれ、後に宮崎家を継いで本籍を東京に変えた。

宇和島から上京して開成学校に入学した。よほど学才が抜きん出ているのだろう。幕府直轄の洋学塾・開成所の流れをくむ開成学校は、M6/4に開校しM10創設の東京大学に引き継がれた。宮崎はその開成学校から工学寮に入学したが、開成時代は極めて短かっただろう。

三好の欄で述べたように、宮崎の Essay テーマは船用エンジンである。海への関心が強かったのに汽車部長となるとは、人生どう転ぶか分からない。卒業成績は二等だった。

M12卒業後直ちに工部8等技手として工部省鉱山局に任用され、官営の阿仁鉱山(秋田県、銀・銅)、生野鉱山(兵庫県、銀)を回ったあと、M14福岡県大牟田の官営三池鉱山の監督として赴任した。当時石炭は艦船用、鉄道用を主体に重要資源とされ、その主産地である三池鉱山は国営化されて、鉱山科卒を始めとして多くの人材を集めていた。なお三池鉱山はM22入札により三井組に払い下げられ、三井三池炭坑として最盛時は日本全体の1/4を産出する大炭田となった。M16に工部省鉱山局が廃止され地域別鉱山局に分割されたのを機に、宮崎は三池鉱山局6等技手の辞令を受けた。

翌年M17に工部省鉄道局6等技手に配転された。3年の炭坑勤めのあと、こんどはその大消費先である鉄道に移ったことになる。そのときの工部大輔(次官)と鉄道局長は井上勝が兼任していた。噂によると、山尾と井上勝は意見が対立する場面が多く、反目し合う仲だったようだ。第一回卒業式の直前まで工部卿井上馨、大輔山尾、鉄道局長井上勝の時代が続いたように、一緒にイギリスに密航した仲間なのに、いつの間にか序列が固定してしまった。井上勝には心中穏やかならぬものがあったのだろう。そのせいか、工部大学校卒は鉄道畑では冷や飯を食うと囁かれた。山尾がM14に工部卿を辞して省を去ったあと、井上勝は鉄道国有化などの持論を強く押しだして存在感を高めていった。M20には二人が同時に子爵に叙爵され、序列はもう消えている。その頃までに工部大学校卒に対するわだかまりも薄れたのだろう。宮崎が鉄道に呼ばれたのは、ちょうどそのようなタイミングだった。

井上勝はM4に鉄道頭に就任して新橋-横浜の鉄道開業を指揮して以来、M43に鉄道院顧問としてイギリス視察中ロンドンで客死するまで、鉄道一筋の道を歩んだ。まさに鉄道の父である。辰野が設計した赤煉瓦の東京駅舎中央付近に皇居を向いた井上勝の銅像が立っていた。復元工事のため撤去されているが、また元に戻って鉄道の行く末を見守ることだろう。

7 任官後工部省鉱山局に勤め、民間会社を経て台湾総督府の民政局技師として活躍した。元祖グローバル土木技師といわれている。

鉄道事業の所管は、大正9年に鉄道省が設置されるまで、工部省、内閣直属、内務省、通信省とめまぐるしく変わったが、宮崎はごく初期を除き通信省の時代を過ごしている。

鉄道に移ってからの宮崎の動静を先ず学会名簿が伝えている。M21版の住所が東京府芝区新橋鉄道局構内11号官舎とあるので、東京勤務から始めたのだろう。その後の職歴は公開公文書と日本鉄道史<sup>8</sup>の中から見付けたものである。

M23 内務省鉄道庁技師、新橋汽車課

M25 神戸汽車課長

M26 通信省鉄道技師、工務課神戸工場長。国産1号となる機関車860型（2軸タンク式）を英国人技術者<sup>9</sup>の指揮下で製造

M29/9 通信省鉄道局汽車課長

M30/10 鉄道技師従六位勲六等宮崎航次を鉄道技監高等官二等正五位に叙任す

M30/10 鉄道技監兼鉄道作業局汽車部長

M32/4 依願免官 通信省退職

宮崎が退職する頃は、通信省の内局に鉄道局、外局に鉄道作業局が置かれていた。国鉄時代に置き換えると、鉄道局は運輸省鉄道監督局（行政）、作業局は日本国有鉄道（事業）に対応し、作業局長官は国鉄総裁、技監は技術部門のトップに相当する。宮崎は工部6等技手月給35円から鉄道キャリアーをスタートし、15年かけて技監高等官二年俸3千円まで上り詰めた。長い坂とはいえませんが、機関車の国産化を牽引し続けた急な坂だったに違いない。

宮崎は公務以外にも車両部門の代表として帝国鉄道協会（東京）の発起人や役員を務め、また軌間の統一問題を審議する軌制取調委員会で主要な役割を果たした。M30の機械学会創設に際しては、鉄道畑を代表して設立に協力し、井口在屋第2期管理長（会長）を助けて幹事（副会長）を務めた。その重要会員が逝去の前年退会届を出して会員から抜けている。会誌に死亡告知が出ることはなかった。病が重くなり会員活動を諦めたのだろう。退会時の住まいは東京市麻生区飯倉町だった。

退官後のもっぱら民間鉄道工業界の支援に奔走したが、3年にわたる闘病生活のすえM41/3に長逝した。享年52、悠々自適の暇もない生涯だった。



\*\*\*\*\*

## 荒川新一郎

*S. Arakawa.*

最後に残った荒川は、工部大学校を一等で卒業し、直ちにイギリス留学を命ぜられる輝かしいスタートを切り、33才で農商務省を退官するまで、洋式紡織の第一人者として縦横の活躍をした。幾つかの人名辞典には荒川の紡織技術者としての経歴が紹介されていて、生年、没年も明らかである。しかし、退官後の経歴は濃霧に閉ざされたように何も見えなくなる。公開公文書を精査して、13年間のブランクのあと、文部省で2年、農商務省で2年の公務に就いたことは明らかになったが、それ以外は依然霧の中だった。その窮状を工2号館図書室の滝沢正順さんが救ってくださった。持ち前の調査力と執念で、東大総合図書館の書庫に眠る膨大な書籍資料の中から「本邦綿絲紡績史<sup>10</sup>」に辿りつき、そこに荒川のかかなり纏まった経歴を見付けたのである。以下の紹

8 上中下3巻 鉄道省編、大正10年刊行

9 Locomotive Superintendentとして設計製造の指揮を執ったR. F. Trevithick。M21来日

10 絹川太一著「本邦綿絲紡績史」第1、2巻 日本綿業倶楽部、昭和12年刊行

介は、それらすべてを総合したものである

荒川も今田と同じく山口県士族の出である。藩校明倫館文学寮で漢文<sup>11</sup>を学んだ後、M3 藩立海軍塾に入り英数三角法を学んだ。M4 上京して海軍兵学寮で学び始めたが、渡英の希望を実現するためあえてそこを退学し、M6 短期間の工部省勤工寮見習を経て工学寮第1期生として入学を果たした。入試も入学後も成績抜群だったようで、卒業前年までの名簿の順位は高峰、志田に次いで3位を占めていた。卒業 Essay のテーマは Cotton Manufacture である。薩摩は紡績に力を入れて日本初の洋式紡績所を作るなど紡績重視の伝統があったが、長州にはその気配は見えない。荒川は紡績が日本の主要輸出産業になる将来を見据え、ひょっとすると入学前から、紡績先進国イギリスに留学することを胸に秘めていたかもしれない。

卒業はもちろん一等で、成績は全体で7位、機械科では高山、三好に次いで3位だった。初志がかなって仲間と一緒にイギリスに渡った荒川は、グラスゴー大学入学という標準コースに乗らず、先ずマンチェスター工芸学校紡績科、次いでグラスゴー専門大学織物科に在籍し、主力は工場実習に当たった。実習先は当時紡績が盛んな6都市の25会社に及んでいる。志田、高山らがグラスゴー大学で成績を競い合ったのとは正反対の行き方で、我が道を行く真骨頂である。M16/2仲間と一種に帰国して農商務省工務局の准奏任御用掛<sup>12</sup>に任用され、直ちに紡績業界の指導に乗り出した。当時は、多くの会社が紡績機械を輸入して洋式紡績を始めたものの、操作の未熟などから生産が上がらず、経営苦境に墜ちるところが続出していた。機械の構造から操作技能まで熟知していた荒川が直ちに第一人者と目されたのは当然である。

M18に紡績工場の技術的、経営的苦境を打破するため東京で綿糸集談会が開かれ、荒川がその会頭を務めた。会場から「機械の原理についてもっと学習したい」という多くの声が上がったが、荒川は「機械の構造原理を理解するなんてとんでもなく難しい。要は機械が正しく設置されることで、あとはその動きをのみこんで使いこなせばいい」と取り合わなかった。装置から操業スキルまで苦闘を重ねて改善を重ねたイギリスと、ぼっと輸入したばかりの日本では、落差が余りにも大きく、その焦りが素気ない言葉として表れたのだろう。

同じM18に荒川らしさを示すもう一つの逸話が残っている。輸入に頼り切りの紡績機械を国産化しようとして、農商務省は工部省工作局に2千錘紡績機10基の製造を委託した。それを担当したのは工作局にいた機械科1年後輩の安永義章、坂<sup>さかたのし</sup>湛<sup>たん</sup>だった。二人は輸入機械の解体スケッチから始めて材料の調達、加工まで筆舌に尽くしがたい労苦を重ね、M16ようやく一基を完成して農商務省に引き渡した。しかし国産化を主張した張本人が転出したせい、完成品は箱詰めのままお蔵入りになった。コストが輸入機械の2倍にもなったので、残りの生産も中止された。2年後荒川にその国産機の性能試験が命じられた。職工45人を陣頭指揮して機械を据え付け、安永や坂が見守るなか先ず綿糸を紡ぐ試験から始めた。そのときの言葉が残されている。「打綿器ノ外ハ役ニ立タヌゾ。君ヲノ事ヲ悪ク上申スル様ナ事ハシネエ。安心シロイ。畢竟コナ製作ヲ云付ケルヤツガイエー悪イエ」長州人なのに何故かベランメエ口調である。上申の結果、国産1号機は野沢紡績に安価で払い下げられた。後日社長の野沢泰次郎が安永に、機械は完全整備後順調に働き、故障もなく安定して生産が上がリ、社業も向上している、感謝と尊敬の念でいっぱいだと伝えている。安永や坂は、先輩荒川をどう見たか、分かる気がする。

M23に工務局技師奏任3等を最後に農商務省を退官するまで、荒川は全国を股にかけて紡績産業の啓

11 留学経験を36項目の指針にまとめた著書「廣業大義」(M17、限定頒布)の総論は漢文で書かれている。

12 月給80円

発指導に奔走した。叱咤激励という言葉がある。小さく叱咤して大きく激励すると人望が厚くなる。荒川は逆に小さく激励して大きく叱咤するたちのようで、畏れて離れるひとも多かったのだろう。

荒川が33才で官を辞した理由はわからない。退官後すぐ、農商務省の商務局と工務局が合体して商工局に変わった。それに強く反対した次官の前田正名<sup>13</sup>と一緒に憤然として辞職したのか。それとも約束の7年間の終わったので、さっさと官に見切りをつけたのか。荒川に聞いてみるしかない。

いったん官を辞すと、公的記録が全く消えて経歴追跡が格段に難しくなる。荒川には生涯父のごとく敬愛し私淑した郷里の先輩品川弥二郎子爵<sup>14</sup>がいた。国会図書館憲政資料室に保存されている膨大な品川弥二郎関係文書の中に8通の荒川書簡が含まれおり、そこから渋沢栄一と京都織物の手掛かりが得られた。渋沢は流行し始めた洋式織物を生産する京都織物の委員長（社長）を引き受けたものの、経営困難が続いた。品川を介して応援を頼まれたのだろう、断りきれない荒川はM24に京都織物会社の専務委員に就任し、明確な計画のもと合理化、すなわち経費削減と生産増強に取り組んだ。僅か2年で業績は飛躍的に改善され、M26新商法に基づく京都織物株式会社に移行することができた。その功績に応えるために渋沢は荒川に慰労株の贈与と社長就任を懇請したが、荒川は両方を断って去っていった。京都織物の年史に、以降荒川の名前はない。何が理由か？ 京都織物の株主には、おっとりした京都の資産家が多かったが、株主総会での質疑で、荒川はいつもの調子の高圧的な口調で答弁した。株主たちの反感が、業績回復くらいでは消えないと、早早に見切りを付けた節がある。

その後荒川は、玉嶋紡績会社の顧問を務めたり、M33の第5回バリエ万国博覧会に際し事務局嘱託として英仏独などの工業視察に赴いたり、気に入った仕事を引き受けて過ごしたようだ。

M36荒川は再び官職にもどり、文部省の発令で新潟県立工業学校の初代校長に就任した。農業県新潟でも県内に一つは工業学校（中学）が欲しいという要望に応えたもので、村松という辺鄙で小さな城下町に誘致・設立された。出来上がった学校は、校舎も実習工場も英国風煉瓦造りで、英国輸入の新鋭紡織、染織機械を備えた見事なものになった。荒川が思い通りの注文を付けたに違いない。その学校は6年後のM42、県央の大都市長岡へ移転が決まった。あまりの交通不便さに音を上げたのだろう。現在の県立長岡工業高等学校がその末裔である。



ここでまた余談を一つ。私は戦後新潟県の父の生家に疎開して、1里ほど離れた近隣の町にある中学2年に編入された。それが県立村松中学で、新制村松高校に変わった後、そこから東大理一に進んだ。はっとして調べると、村松中学は工業学校が去ったあと、その敷地と校舎を引き継いでM44に創立されたものである。私の在校時も今も、正門には古びた煉瓦作りの門柱が3本立っている。煉瓦の積み方が、太い2本はイギリス式、細い1本はフランス式と珍しく、国の登録有形文化財（建造物）に指定されている。荒川はイギリスと並ぶ紡績先進国フランスを公平に遇している。そのこだわりには舌を巻く。それとも知らずに、私は青春の5年間、その脇を通り続けた。

校長生活2年後のM38、荒川に農商務省から花筵検査所技師の辞令が出た。当時アメリカに大量輸出

13 明治の官僚、農商務省で陸奥宗光と対立して辞職。殖産興業の推進者。貴族院議員、男爵。

14 靖国神社脇の九段坂公園に大きな銅像が立っている。駐独公使、独逸学協会学校（獨協学園）創立。

されていた花柄の筵に粗悪品が混入し、花筵全体の評価を落とす恐れが出たので、神戸に新しい検査所を設置して国が直接監督に乗り出したのである。荒川はそこの所長に任命された。花筵はい草で編んだ織物だから荒川の専門には違いないが、やや違和感を覚える。荒川も同じ思いだったかも知れない。2年後に提出された辞職願の中に、「宿痾のため近来益々神経衰弱仕り職務に堪え難し」と理由が添えられている。志とは遠い仕事に苛立ちの日々を送ったのだろう。M40以来荒川は再び官に戻ることはなかった。大正に入ると、朝鮮総督府や李王職美術品製作所の嘱託を務め、大正6年には市立大阪工業学校<sup>15</sup>の高等紡織科長に就任したと伝えられている。恐らくそれが最後の仕事だっただろう。

鹿島紡績所<sup>16</sup>を創立した鹿島萬平の孫娘と結婚して破局、再婚の妻子とも別れて、晩年は阪神沿線今津で部屋借りして自炊生活を送った。昭和5年3月、桜の訪れを前に73年の孤高な生涯を閉じ、山口市北東郊外にある父祖の墓所に帰った。

荒川は群れることを生涯拒み続けたようだ。卒業直後、第一回卒業生が集まって工学会を作るとき創立委員を務めて会員になったが、その後は学士会や機械学会などの会員になった形跡は全くない。M33の訪英を機に英国機械学会<sup>17</sup>正員に推挙されているが、イギリスだけは別格だったのだろう。

荒川には品川子爵を別にしても、親族や知人に明治の政財界にわたる有力者が揃っていた。しかし、それらの人脈を活用するどころか、かたくなに付き合いさえも拒んだ。その高すぎる自負と狷介な性格が、自らの可能性を行き止まりの小路に押し込んでしまった。死に臨んでいかに生涯を振り返ったか。恐らく昂然として悔いるところはなかっただろう。

## あとがき

先輩5人の足跡を追うごとに、次第にのめり込む自分を抑えきれなかった。一つ知ると、次が知りたくなる。ほとんどはネット検索で片づくが、その限界を超えると図書館通いになる。デジタル化されていない情報の方がまだ圧倒的に多い。集めた資料はかなりの量に及んだ。その資料から、いかに的を絞って読み物に纏めるか、それが問題だった。本人の経歴を辿るのが精一杯で、成績ばかりがよく出てくるが、人柄は伝わらない。書き足したいことも残っているが、これ以上は読者の迷惑になるので、きっぱり打ち切ることにする。

我々の元祖に当たる5人の大先輩は、わが国初の大学工学教育を終え、わが国初の工学士として官職に就いた。その希少価値からも、極めて優位な位置から職歴をスタートしたに違いない。その予想は完全に覆った。いまでいえば高卒と一緒に官職の底辺から登り始め、それぞれの道を切り開いた。帝大出の学士というだけで優位なスタート位置が保証されるようになったのは、明治40年頃からとされている。それまでの先輩が築いた実績と信頼が、その後の後輩に大きな恩恵を与えている。古い先輩を思うとき、感謝の念を忘れてはならない。

この5人の直系の後輩はすでに1万人を越え、うち7千余人が存命で、5千を超える現役が世界に広がって活躍している。いまこの5人が我々の前に現れて口を開くとすれば、何を語るだろう。バイオニアタレというかも知れない。我が道を行けというかも知れない。若いうちに苦労しろというかも知れない。私には「数ある大学機械工学科の卒業生の一人だと思ふな。本家の責任を自覚し、見本を示し全体を引き上げる気概を持って……」という声が聞こえる。

日本再生のために明治維新が再び脚光を浴びている。明治は活力に溢れる時代だった。しかしそれ

15 大阪市立都島工業高等学校と同泉尾工業高等学校の前身。高等紡織科は確認できない。

16 M5創立のわが国初の民間洋式紡績工場。鹿児島、堺紡績所とともに始祖三紡績と呼ばれる。

17 Institution of Mechanical Engineers、1901に日本人9番目の正員として選出された。

は、さまざまな差別とそれを跳ね返す強烈な向上心に裏付けられていた。士族平民の身分差から、官位、勲位、爵位と何重もの階層があり、人はいつもそれを背負って世に出ていた。いまの日本には、みんな同じがいいという風潮が染みついている。維新の昔に戻るとしても、すべての遺伝子を初期化することは暴挙である。でも、上を向いて登り続けようとする遺伝子だけは、何としても初期化しなければならない。

調査に当たり多くの方々のご協力を得た。その筆頭は滝沢正順さんに違いないが、福沢清和、松本洋一郎、遠藤隆、安達弘哉、落合兼司、茅原健の各氏にもお世話になった。三浦宏文同窓会長と渡辺亮事務局長に、このような異端の寄稿をお許し頂いた。ご厚意に厚くお礼申し上げる。

やっと探した情報の真偽を見分けることは、ほとんど不可能である。読後に記述の誤りを見付けた方、あるいは新しい情報をお持ちの方は、ぜひ同窓会事務局にお知らせください。将来この5人の伝記が機械同窓会編に格上げされることを願いつつ。